

お母さんの顔

赤ちゃんは何を見て、育っていくのでしょうか。刷り込みと呼ばれるように、生まれて初めて見る顔を親と認識します。初めて出会うのは母親の顔ですから、顔の役割はここから始まるのです。赤ちゃんは成長していく過程で顔を見ていくだけでなく、母親の瞳の中にある自分の顔を映しながら育っていくのです。子育てには様々な不安や心配がつきもので、時には母親の瞳には様々なフィルターがかかってしまいます。心配な顔で赤ちゃんを覗き込むと、その心配を赤ちゃんが感じてしまいます。神経質に育てられると神経質に、ゆつたり育てればゆつたりした子どもに育つと言われます。逆に、母親も赤ちゃんの瞳の中に自分の顔を映して、母親として成長していくのです。具合が悪いときの赤ちゃんの表情は母親の心配を強め、逆に笑顔は母親を安心させ、母親の笑顔もまた赤ちゃんを安心させるのです。

赤ちゃんの具合が悪いと、診察

室で涙を見せる母親がいます。そんな時「泣いても病気は治らないよ。苦しんでいる子が、涙を見たら何とと思う。頼れるのは、お母さんだけなんだから。陰で泣いてもいいけど、嘘でもいいから笑顔を見せて」と諭します。母親が心配な顔を見せれば、子どもは自分の病気が重いのかと感じて、余計に具合が悪くなってしまうものかもしれません。

医学部の学生に赤ちゃんを抱っこさせると、例外なく笑みを漏らします。そんな不思議な力を、赤ちゃんは持っているのです。赤ちゃんの笑顔は、もつと素晴らしい力になることもあります。育児以外のことで心配があつても、赤ちゃんの笑顔で癒される。誰でも経験しているに違いありません。親と子どもはお互いの瞳に自分という姿を映し合いながら、育ち合っているのです。

小学生には、症状を自分で説明させます。でも、なかなかうまくい

きません。上手に説明できないこともありますが、ほとんどの場合お母さんが勝手に話し始めるのです。「〇〇君。今日はどうしたの？」と聞くとき、すかさず「実は昨日から熱が出て…」と答えはじめます。黙っていてと言っても、子どものものじもじする姿を見ると、またまた口を挟んでしまうのです。もう一度質問すると、答えられない子どもは母親の顔を覗き込みます。そして質問した相手ではなく、母親に答えてしまうのです。母親という通訳がいなくて、言葉や気持ちを伝えることができず、勝手に病名を付けるわけにはいきませんが、母親の顔症候群とも呼びたいくらいです。一体、この理由は何なのでしょう。推測の域を出ませんが、子どもが何かしようとする前に、何でも先回りしてしまうことも原因です。少子化や情報過多の影響で、親御さんは一生懸命子育てをします。いつの間にか愛情を通り越して、干渉をし過ぎているのかもしれない。子どもが自分でするまで、待つ余裕がないことも要因でしょう。また命令や禁止を主体とするような育児法も関係しているのかも知れません。子どもは自分が答えを出す前に、母親の顔が気になって仕方

ないのです。現在の若い人たちは自分から積極的に行動が来ず、他人からの指示を待っている「指示待ち族」が多いと言われています。こんな大人にならないためにも、子どもの自発的な芽を摘まないようにしたいものです。

顔の話を二つ、必要なお母さんの顔と不必要なお母さんの顔です。赤ちゃんのうちにはよくお互い顔を見つめ合うことが必要ですが、自立出来る年代になったらお母さんの顔を頼りにしなくて済むようにしたいものです。

ナビゲーター

小児科専門医

川村 和久

仙台市在住



医療法人社団かわむらこどもクリニック医院長。日本の小児科サイトを運営する、言わずと知れた小児科専門医。「お母さん達の心配・不安の解消」を理念に、日々の診療にあたっている。宮城県小児科医会理事。2001年には医師として大変名誉のある日本小児科学会パネリストとして選ばれる。

【2008年4月号「ひよこクラブ」】「小さく生まれた赤ちゃん5人のすくすく成長日記」のコーナーを監修し疑問や悩みに答えるとともにメッセージを掲載。

<http://www.kodomo-clinic.or.jp/>